

あとがき

今日の中国は、20年来の持続的経済発展によって急激な社会の変容を伴いながらグローバル大国としての存在を示しつつある。同時に、2005年の反日デモや2010年の尖閣漁船事件が示すように、21世紀の日中関係は容易に政治問題化するデリケートな存在となっている。日中の相互依存関係は、ヒト・モノ・カネ・情報の交流の飛躍的拡大によってますます深化しているが、新たな環境下における安定的な「共競」関係として日中関係を再構築することは、私たちに課せられた責務である。その際、中国近現代の歴史的射程に関わる確かな理解は、現代日本の立ち位置を凝視し、20世紀の日中関係、さらには21世紀の東アジア地域秩序と国際社会に関わる今日的課題群をめぐる私たちの有意な思考を担保するという点で、極めて重要である。

本書は中国近現代史の始点を清朝の斜陽（1800年）に置き、21世紀にいたる200年の過程として描写する。第1編「東アジアの転換」は、清朝黄金時代の終焉と内憂外患の頻発、西洋列強との交際の恒常化、日清戦争と東アジア変貌の過程を概観する。第2編「両大戦と中華民国」は、北洋軍閥の時代から国民党の時代にいたる中華民国時代（1912-49）を、2つの世界大戦によって特色づけられる20世紀前半期国際政治の一部として論じる。第3編「現代中国の軌跡」は、1949年に成立した中華人民共和国の歩みを、2つの転換（資本主義から社会主義への転換、社会主義から市場経済への転換）として跡づける。

また「序章 近代世界と中国」では、中国近現代の歴史を学ぶことの意味を中国史の文脈から解説し、「終章 日中新時代の見取図」では、日中経済、政治改革、「個」のレベル、歴史認識という視点から、今日の日中関係を展望する。

* * *

本書は、池田誠・安井三吉・副島昭一・西村成雄『図説中国近現代史』（法律文化社、1988年）の後継本として企画・執筆された。

中国との本格的な交流が可能となった1980年代、関西地区を拠点とするインターカレッジの研究会「中国現代史研究会」（<http://modernchinarwx.jp/>）は、1982年「中国近現代史学術雑談会」を中国社会科学院経済研究所（北京）・南開大学歴史系（天津）・上海社会科学院経済研究所（上海）で開催、87年には共同研究の成果として『抗日戦争と中国民衆——中国ナショナリズムと民主主義』を出版した（池田誠編著、法律文化社）。『図説中国近現代史』は、このような研究会活動の延長線上で88年に執筆・発行された。同書は多くの

読者を獲得し、93年に新版、2002年に第2版、09年に第3版と版を重ねてきた。

『図説中国近現代史』の改訂が中国現代史研究会に参加する次世代の研究者に託され、清末史が専門の岡本隆司、中華民国史を主たる研究対象とする菊池一隆と田中仁、現代中国研究の加藤弘之（経済学）と日野みどり（人類学）による5人のチームを編成することになった。私たちは、本文と図版による見開き2頁という旧版のコンセプトを継承するとともに、項目数（紙数）も概ね従来どおりとすることにし、大まかな執筆分担を定めて内容の全面的刷新を行った。ただし図版については、旧版のそれが的確かつ貴重であることから、本書においても多くを踏襲した。

本書の執筆分担は、岡本隆司（序章、第1編）、菊池一隆（第2編1・2章、5章1・3、終章4）、田中仁（第2編3・4章、5章2、第3編1章1、5章2、終章2）、加藤弘之（第3編1章2、2章1・2、3章、4章4、5章1、終章1）、日野みどり（第3編1章3・4、2章3、3章2、4章、5章3、終章3）である。

最後に、本書の企画から編集にあたって、私たちを激励し、かつ周到な編集作業によって支えてくださった法律文化社の田藤純子社長、ならびに編集部のみなさまにお礼を申し上げます。

2012年1月

執筆者を代表して

田中仁